

第 70 回日本小児保健協会学術集会 シンポジウム 6

「こどもたちと『いのち』について考える～医療・
保健従事者だからできることは？」

いちばん頑張ったのは自分
—いのちの大切さ伝え隊の活動から—

平井 和恵（一般社団法人鳥取県助産師会）

I. はじめに

鳥取県は日本で一番人口の少ない県である。2021 年の合計特殊出生率は 1.60 と全国で 3 番目に高く前の年より増加しているが、20 代の若者が少なく出生数は減り続け、年間の出生は 3,800 人ほどである。鳥取県助産師会（以下助産師会）は、そんな小さな県で活動する助産師の職能団体である。県内の半数近い助産師が入会しており、会員は現在 131 人。ほとんどが病院や診療所で勤務し、開業助産師は 16 人ほどである。助産師会の事業として公益社団法人日本助産師会の助成による「子育て・女性健康支援センター」を運営しており、電話・メール相談、いのちの出前教室を実施している。本稿ではこの事業の内「いのちの出前教室」の活動の経過や内容について報告する。

II. 子育て・女性健康支援センター事業のあゆみ

「子育て・女性健康支援センター」は、1999 年当時の日本助産師会鳥取県支部（現・鳥取県助産師会）池田悦子支部長宅の固定電話を使用した電話相談からスタートした¹⁾。2001 年には鳥取県の 10 代の人工妊娠中絶実施率が全国ワースト 1 というショッキングなニュースが報じられ、現在では女子人口千対の件数は全国平均に限りなく近くなったが大人も含めた全年齢の中絶実施率は相変わらず上位に位置している²⁾。理由はさまざま考えられるが、はっきりとしたことはよくわかっていない。統計を遡ってみると元々鳥取県の数字は高く、悲しいことだがいわゆるそうした風土であると言えなくもない。いずれにせよこの人工妊娠中

絶実施率、特に 10 代の数字を下げるためにも子どもへの性教育が必要であると誰もが強く感じたところである。助産師会でも 2003 年から準備を始め、2004 年にいのちと性の出前教室を実施する「いのちの大切さ伝え隊」をスタートさせた。翌年には鳥取県の補助事業となり、その後現在まで継続発展してきた。2010 年には中高生対象の教室「未来のパパママ育みデマ教室事業」、2013 年には高校卒業後の若者対象の教室「今から始まる！いつかはパパママ事業」を始め、併せて相談窓口も重要と考え、電話・メール相談事業を「とりともっと」（共にもっと話しましょうの意）と名付け、これら 3 つの事業が県の委託となり現在にいたる。

III. いのちの大切さ伝え隊について

1. 活動開始から今日まで

学習指導要領の改訂や健やか親子 21 の取り組みなどもあり、県内でも 1998 年頃から学校での性教育や道徳の時間に助産師個人に講演依頼が来るようになった。主な内容は小学校低学年向けにお腹の中の赤ちゃんの話や誕生の話、中学生向けに性の話などが多かった。はじめは助産師個人がバラバラに活動していたが、これから 21 世紀はアンサンブルの時代だとの心意気で県西部の助産師 3 人がチームを組んで活動を始めた。その後、助産師会で研修会を開催し、助産師会の事業とするよう進めてきた。

私たち助産師は、妊娠、出産、子育てを通していのちの側で母子と家族を支えている。お母さんが命がけで赤ちゃんを守り、お産をするその姿をつぶさに知っている。誕生の場面では命のぬくもりやその力強さを、

亡くなってしまう命の側ではそのはかなさを、見て、聞いて、肌で感じて知っている。そして、お母さんやお父さんの視点ではなく助産師が見た赤ちゃんの頑張りを伝えることができる。何時間もかけて静かに泣き言を言わずに頑張って生まれて来たことを「それはあなた自身のことだよ」と子どもたちに語ることができる。また、性と生殖に関わる専門職として科学をベースとした話をするができる。

そうした気持ちを持つ助産師が集まり、2004年に「いのちの大切さ伝え隊」（以下伝え隊）を発足させた。モデル事業を実施し、私たちの活動を知ってもらいところから始めた。プログラムの内容を検討したり、使用する教材を手作りしたり、講演の練習、リハーサルなど何度も集まり準備をした。補助金事業が委託事業となったことは先に述べたが、有料の講座も含め活動の規模は徐々に大きくなり、現在では年間約140講座を実施し、児童、生徒はもちろん保護者、社会人など年間約7,000人に会っている。

この経過の途中で鳥取県内でもさまざまな事件があった。望まない妊娠の末、赤ちゃんを捨ててしまった。また、若い夫婦の乳児虐待死亡事件、出会い系サイトで知り合い妊娠し、嬰兒を隔年で2人産み殺めてしまった事件など。その度に委託事業の規模が拡大したり、補正で予算が付いたこともある。

準備期間から数えると20年、これまで関わった隊員の数は40人を超え、現在は約20人が活動している。年齢、経歴や現在の仕事もさまざまである。また、県の委託で年に1人ずつ思春期保健相談士の資格を取得しており、そのセミナーで得た知識や情報を隊員全体で共有し、隊員の質の維持、向上に努めている。最近では、国際セクシュアリティ教育ガイダンス、包括的性教育なども積極的に取り入れている。

2. 活動の目指すもの

伝え隊の活動の目的は発足当時から変わっていない。「いのちの温かさ、力強さ、はかなさを理解できる」「性の主体者である自分、次の世代へのいのちのバトンを持っている自分に気づく」「人間の関係性としての性といのちの大切さを理解できる」の3つである。

そして、助産師が語りかけることにより、「いのちのぬくもりが伝わり、自尊感情、自己肯定感といった生きるエネルギーが高められる」「自他のいのちがかげがえのない大切なものであると、より深く理解でき

る」「お互いに慎重な性行動が必要であると理解できる」ことを目指している。

3. いのちの大切さを伝えるためのほっとメニュー

いのちと性の出前教室なので、出前メニューを用意している。中学生向けのメニューを紹介する（図1、表1）。これを基本にして児童や生徒の学年、発達段階、理解度や背景に合わせてプログラムを組み立てる。一番助産師らしいメニューは1と2であり、ここではこれを中心に述べることとする。

メニュー1では、排卵・月経や射精といった自分の体の変化や生殖の仕組み、胎児の成長や能力、胎内での様子、妊娠中の母親や家族の様子を話し、続いてメニュー2で出産のメカニズムやその様子を話すという流れである。思春期の体の変化は、特に女子では時に煩わしく不快なこともあるが、体の成長の意味や健康でいることの大切さを伝え、月経を肯定的に捉え、自分の体を大切にしようと考え始める。男女がお互いの体について知ることによって労る気持ちを持つ生徒もいる。精子や卵子の大きさや数、受精の様子を伝え、千載一遇のチャンスの中で自分の命が始まったことに驚き、続いて妊婦の様子や周囲の人たちの気遣いを話すと、自分が大切に育まれたことを思い、今度妊婦さんに会ったら親切にしようと言ってくれる。胎児の成長や能力、出産の場面での赤ちゃんの頑張りを聞くと、自分がそんなすごいことをやってきたのかと驚き、母親や周囲の人への感謝の気持ちを持つようだ。

私たちが心がけていることは、科学的で分かりやすく、赤ちゃんが主人公のストーリーを話すことである。子どもたちは自分自身のこととして聞いているが、学年によって捉え方が違う。小学生や中学1年生あたりは、赤ちゃんと自分を重ねることが多く、中学3年生くらいから高校生以上は、自分が赤ちゃんを授かる立場として聞いているように感じる。

その他にもいくつかのメニューを用意している。性の主体者である自分、人と人との関係性としての性について知識や理解を深め、自分らしく、お互いを大切にする行動ができるような内容を提供したいと考えている。

4. 教材の工夫

いのちや性の温かさを伝えるために、使用する教材はできるだけ手作りの物を使用している。特に布や紙、

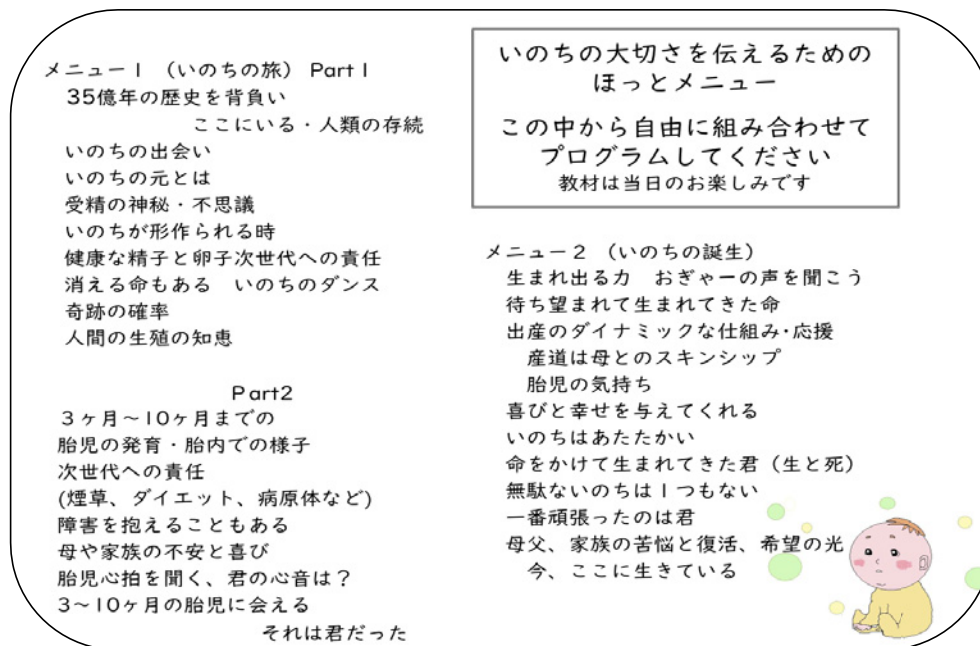


図 1 いのちの大切さを伝えるためのほっとメニュー 1, 2

表 1 その他のほっとメニュー

3	いのちは育つ 子育て いのちへの責任
4	私はわたしが好き 思春期の心と体
5	性って何? 性の意義
6	生きるって? 死ぬってどういうこと? 死と人のぬくもり 誕生死
7	恋する心はすてき 交際のマナーとルール
8	誰にでも起こりうること 予期しない妊娠 性感染症 性被害
9	Yes/No と言える私 自己決定 No を尊重
10	3つの命を守る方法 避妊 性感染症予防
11	自分らしく生きる 性の多様性

木の素材を使い、スライドは原則使っていない。図 2, 3 は 20 年の間に増えてきた教材の数々である。アイディアを出し合い、時には夜なべをして皆で作った。学校や講座毎に話す内容が違い、それに合わせて作っている内に増えてきた。子宮を模したエプロンは助産師が袖を通して子宮と卵管になり、卵子や精子の動きを見せたり、内膜が剥がれる様子が分かる。子宮と同じようにエプロンで男性の生殖器を表現したものは陰茎の中が透けて見えるよう工夫している。陰茎も陰囊も延びたり縮んだりし、包茎にもなる模型もある。性器は男性も女性も合理的な形をしていること、自分でも見たり触ったりしてよいこと、どのようにケアをするかも模型を使って説明している。妊娠週数に合わせた大きさや重さの胎児人形は、群馬県助産師会の鈴木せい子先生が考案されたものやメンバーが手作りした

ものを使っている。妊娠 8 週頃の胎児人形を見せたり持たせてみると、小さくても体の形ができあがっていることに驚く。

5. キャリア教育として

伝え隊の講演は必ず 2～3 人のチームで実施する。1 人が語り、2 人が教材を動かすことや、語る人が替わることで子どもたちの目を覚まさせる。活動を始めた頃は助産師についてその名称を聞いたことがないと答える生徒がほとんどで、そんな仕事があったのかとびっくりする生徒も珍しくなかった。この出前教室はキャリア教育の一環ともなっており、活動が続ける内に、徐々に助産師の名前が知られるようになり、感想文の中に助産師になりたい、助産師になろうと思っていたという言葉が見られるようになってきた。担当するのは、おばあちゃん世代の助産師、お母さん世代の助産師、若い助産師とさまざまで、定年がなく元気でいれば長く働くことができる助産師としての魅力を伝えることもできる。近年は、中学の性教育で助産師に出会いそれで助産師を目指したという学生がちらほら出てくるようになっており、伝え隊の喜びとなっている。

6. いのちは温かく伝えたい

メニュー 2 で出産のシーンを再現しながらお母さんやお父さんの様子を話す時、必ず伝える言葉がいくつ



図2 めくもり教材（性器モデル）



図3 めくもり教材 20年の積み重ね

かある。初めて赤ちゃん抱いたお母さんからの「生まれてきてくれてありがとう」という言葉。そして、お産はお母さんはもちろん赤ちゃんも命がけであること。胎児心音の落ちる様子を聞いてもらい、小さな体で死に近づきそうになりながら苦しい中「いちばん頑張ったのは自分」あなたですよ、と。そして、お産の現場は「幸せと喜び」であふれ、どの子もおめでとうと言われて迎えらる。さまざまな境遇の赤ちゃんがいることを助産師は知っているが、もしそこに助産師や医

師がいたなら必ずおめでとうと言うであろう。どの子も「待ち望まれて生まれてきた命」であるはずである。そして、出産が近づけばお母さんやお父さんの願いはただ1つ、生きて生まれてほしいということ。産声を聞いた瞬間お母さんもお父さんもそれ以上のことを望まず「生きてるだけで100点満点」と強く思う。そして、最後にどの命も同じように頑張ってきた命。「自分の命も相手の命も大切に」と締めくくる。

7. 生徒のからの言葉

講演の後は感想文をいただく。一例を紹介する。

「生命の成り立ちと出産の様子を聞き、自分が生きていることだけすごいことだと知った。これからの時間を大切に過ごしたいと思った。」と自分自身の今とこれからを考えたり、「長い時間をかけて1つの命を作り出すことにびっくりした。」など、命の仕組みを知ること驚いたり、「母とけんかするのが情けなくなった。」と、反抗期の自分を振り返る生徒もいる。「自分が親になるときのことを思うとワクワクする。」と楽しみにしてくれる生徒もいる。そして、私たちが講演の中で決して言わない言葉がある。それは「親に感謝しましょう。」という言葉だ。命がけで産んでここまで育ててくれたのは親や家族だが、それは命を授かる側の責任であり、そして喜びである。助産師は赤ちゃんを取り上げさせてもらって喜びを分けてもらっている。感謝するのは大人の方である。しかし、講演を聴いた子どもたちの多くは親や周りの人への感謝を表現してくれる。ありがたいことである。「一番たいへんなのは赤ちゃんだと分かった。自分ってすごい」という感想も多い。自分自身が頑張れる存在だということを改めて知り、自己肯定感が高められる。自分はこの世でたった1つの大切な命、すごく頑張ったんだ、自分にもできるんだという気持ちを大切にしてほしいという私たちの願いが通じた思いである。

そして、一番反応がいいのが「生きてるだけで100点満点」という言葉だ。普段数字で評価されることが多いからかもしれない。特別支援学級の生徒の感想として「ぼくはおはなしをきいていきっていることをじっかんした。」とあった。拙い文字で丁寧に書いてくれた。死にたくなっていた生徒が「1か月くらい前まで死にたくて、今でも少し消えたいと思っていたので、生まれてきたことが100点と言ってくれて泣きそうになりました。今までリストカットをしたりしていたので、自分の大切さや、お父さんやお母さんに悲しい顔をされた理由が分かりました。もうすぐ生まれるお姉ちゃんの赤ちゃんのことがとても楽しみになりました。」と寄せてくれたこともある。一度だけ「生きてるだけで100点じゃ困るのよ。生きてるだけじゃダメだから勉強しに学校に来るんでしょ？それで100点とか言われたら、もう怠けちゃうでしょ。」と中学の先生に講演前の打合せで言われたことがある。結果、生

徒からもらった感想は「すごく心に響いて、これからも頑張って生きていこうと思った。勇気をもらった。」とのことで先生が考えるより生徒はずっと賢いのだと痛感した出来事であった。

IV. おわりに

最後に、伝え隊のメンバーがお父さんや子どもたちから聞いた話から作った詩を紹介する。

「覚えているよ」 山根美奈子

お父さんはお前が生まれた時 君のそばにいた
お前ったらぐちゃぐちゃな顔してさ おあくびして
時折 まぶしそうに俺をながめてた
そっと小さな小指をつついてみた
生きてる そっと臭いをかいでみたら
柔らかな春の日差しのようなだった
お父さんはお前が生まれた時
お父さんになれたんだ
うれしくて ひとり 台所で泣いたこと
君は知らないだろう
君の心のそばに いつまでもいてやるよ

水の中から私は生まれた
暗いトンネルを抜け この世に生まれ出た
あなたたちの愛の形として 今 ここにいる
ママ パパ やっと会えたね
ママ ぼく知ってるよ
何で生まれてきたのか
ママとパパに会いたかったから
みんなに会いたかったから

性と命には時代と共に難しい課題も出てくるが、これからも子どもたちの「自分ってすごい」という気持ちを引き出せるよう温かみのある健康教育を続けていきたい。

文 献

- 1) 一般社団法人鳥取県助産師会. 子育て・女性健康支援センターの活動の歩み. 2019.
- 2) 厚生労働省. 令和4年度衛生行政報告例. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/36-19.html> (参照 2024.04.19)